

土崎港（秋田港）の「みなと文化」



【「秋田風俗絵巻」より大浜＞】

渡辺 英夫

目 次

第1章 土崎港（秋田港）の整備と利用の沿革	13- 1
1. 古代（渤海使節来航の港）	13- 1
2. 中世（海洋豪族安東氏の日本海交易を支えた土崎湊）	13- 2
3. 近世（北前船で賑わう土崎湊）	13- 3
4. 近代（大型クルーズ客船を迎える近代港湾）	13- 6
第2章 「みなと文化」の要素別概要	13- 8
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」	13- 8
(1) 名字と町名	13- 8
(2) あいや節	13- 8
(3) 金刀比羅神社石製狛犬	13- 8
(4) 永福山嶺梅院の出雲石灯籠	13- 9
(5) 宝塔寺石造り五重塔	13- 9
(6) かすべ	13-10
(7) 秋田街道絵巻と秋田風俗絵巻	13-10
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	13-12
(1) 虚空蔵尊堂の手水石	13-12
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	13-13
(1) おぼろ昆布	13-13
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	13-14
(1) 土崎神明社祭の曳山行事	13-14
(2) 『種蒔く人』	13-15
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	13-16
(1) 町並みと小路	13-16
(2) 寺町	13-16
(3) 五輪塔	13-17
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き	13-18
【参考文献】	13-20

所在地：秋田県秋田市	港の種類：港湾	港格：重要港湾
------------	---------	---------



【位置図】

(Google map に図形を加筆)



【現況写真】

(国土交通省秋田港湾事務所 HP 掲載写真に加筆)

第 1 章 土崎港（秋田港）の整備と利用の沿革

1. 古代（渤海使節来航の港）

『日本書紀』によれば、西暦 658 年、斉明天皇の命を受けた阿倍比羅夫は水軍 180 艘を率いて日本海沿岸を北上し、蝦夷を討ち、あるいは懐柔しつつ北海道まで進んで肅慎（ミシハセ）を征討したと伝えている。このとき「罽田蝦夷恩荷」は「罽田浦」に結集した比羅夫率いる船団を見て朝廷に仕官すると誓って比羅夫の軍勢に服したという。「罽田」は「飽田」とも記され、「罽田浦」は秋田浦を指し、「恩荷」は男鹿に通じるので、ここに暮らす蝦夷の長ではないかと考えられている。

その後、朝廷の北方経営は順調に進んだとみられ、天平 5 年（733）には秋田市の高清水岡に「出羽柵」が置かれ、天平宝字 4 年（760）、これを「阿支多（アキタ）城」と改称したと『日本書紀』は記している。「柵」は城柵あるいは砦の意味で、辺境を經營するための軍事拠点だった。昭和 34 年（1959）から始められた発掘調査によりその遺構が確認され、今では政庁跡や東門、築地塀、厠舎跡などが明らかになっている。

ここで注目すべきは来客を迎える施設に設けられた厠舎で、斜めに設置された木樋に水を流して便を沈殿槽に送る水洗トイレが発掘された。そして、その沈殿槽から豚を常食する人にしか寄生しない有鉤条虫の卵が見つかった。しかし、高清水岡に出羽国府が置かれたころ当地に豚はいなかった。ちょうどその頃、日本海を隔てた大陸には渤海国が起こっており、神亀 4 年（727）、その使節団が初めて出羽国に来航すると、以後 8 世紀には計 6 回にわたって出羽国を訪れている。その航路は、まずシベリア沿岸を北上してから樺太に渡り、そこで向きを変え北海道西岸から津軽海峡を南下して来たと考えられている。だが、具体的に出羽国のどこに回着したのか、史料からは確認できていなかった。それが 8 世紀秋田城のトイレ遺構から見つかった寄生虫により、豚を常食する渤海使が訪れたのは

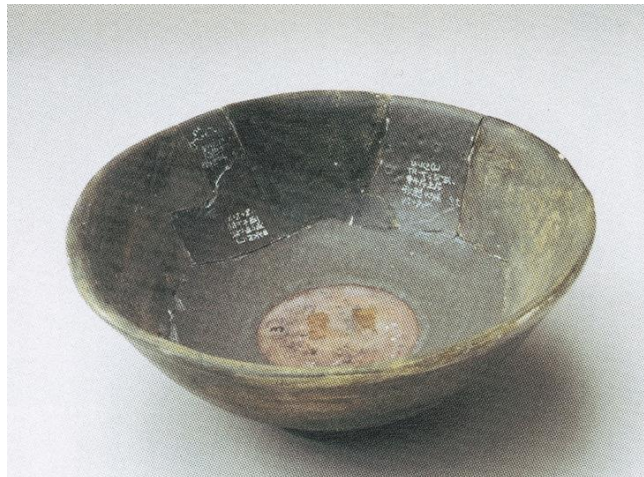
土崎湊である可能性が高まった。



【古代秋田城の水洗トイレ】

2. 中世（海洋豪族安東氏の日本海交易を支えた土崎湊）

土崎湊では、その後も大陸との交流が続いていた。古代秋田城から北西に一段低くなった雄物川の河岸段丘上に後城遺跡が発掘された。そこからは能登・越前・美濃、そして瀬戸方面で焼かれた国産の中世陶器に混じって、唐銭や宋銭・明銭、さらには中国産の磁器も多数出土した。時代的には鎌倉後期から室町・戦国時代にかけての生活の跡を偲ばせる多様な遺物が出土している。白磁は越前一乗谷の朝倉館出土品と同類で、ここに暮らした人びとの交易圏の広さに驚かされるが、これを実現したのは海洋豪族ともいわれる安東氏の活動だった。



【後城遺跡出土の中国青磁】

安東氏は康平5年（1062）、前九年合戦で源頼義に討たれた安倍貞任を祖とし、その子孫が津軽に落ち延びてそこに土着したと伝えられる。鎌倉時代、安東氏は現在の南津軽郡藤崎町を拠点に開発領主として勢力を伸ばし、北条氏の庇護を受けて津軽代官となり、また蝦夷管領にも任じられたという。安東氏は日本海に面した十三湊に本拠を移すと、室町時代には南部氏に攻められ、安東盛季は蝦夷地に逃れたが、その前に弟の鹿季は出羽国秋

田郡に分家したという。これにより安東氏は2家に分かれたが、やがて蝦夷地に逃れた安東氏は、能代湊から米代川を入った檜山に山城を築いてここに本拠を移した。一方、鹿季の子孫は、その後、土崎を拠点に秋田郡に勢力を伸ばす。これを湊安東氏という。

元龜元年（1570）、檜山城主安東愛季は事実上、湊安東氏を合体し、愛季が没した2年後の天正17（1589）には、愛季の子実季は一族の内乱を鎮め、戦国大名としての基盤を固めた。その安東氏の史料によれば、安東氏と材木の関係は古い。安東氏が津軽十三湊を本拠地としていたころ、安東氏は若狭国小浜の羽賀寺を信仰し、永享8年（1436）、安東康季は材木を送ってその金堂を修造したことが知られている。

越前三国湊に伝えられる「廻船大法之巻」には、戦国時代に繁栄した湊として三津七湊が記され、「出羽秋田」はその七湊の一つに数えられている。学術的には七湊の記述は、江戸時代の書き込みと見られるが、出羽国秋田湊の発展は根拠のないものではなかった。

当時、日本を訪れた宣教師たちによって出羽国秋田の賑わいが記録されている。永禄8年（1565）正月、イエズス会の宣教師ルイス・フロイスは京都で知り得た情報として、インドにいる同僚に宛て手紙を送り、その中で日本の北方に暮らすアイヌの人びとについて触れ、「彼等の中にゲワの国の大なる町アキタと称する日本の地に来たり交易をなす者多し」と述べている。秋田は出羽国の大なる町で、そこは日本の国内だという。この「大なる町アキタ」が安東氏の本拠地たる秋田であることは間違いなく、アイヌの人びとが交易に訪れた場所こそ土崎湊だった。当時、土崎湊は相変わらず北方交易の窓口となっていたのである。

天正18年（1590）、豊臣秀吉は小田原の北条氏を滅ぼすと、その翌年から安東氏に対して大量の杉材を上納するよう命じている。それは、文禄・慶長の役に使う船の用材であり、また、伏見城築城のためだった。これを太閤御用板、あるいは伏見作事板という。文禄元年（1592）、秀吉は前田利長に大安宅船の建造を命じ、秋田太郎こと安東実季には大船一艘分の船材を利長に届けるよう申し付けている。

戦国大名として豊臣家臣団の一員となった実季は、秋田氏を名乗り、秋田城介と号した。実季は中央とのつながりを深め、若狭国小浜の羽賀寺が衰退しているのを知ると、かつてのように同寺への材木寄進を復活させている。そして、実季は関ヶ原の戦い直前の慶長4年（1599）7月、現在、土崎神明社の建つところに新城を築城している。これは、中央につながる日本海の手海運を利用しやすい町づくりを考えてのことだったと見られる。

3. 近世（北前船で賑わう土崎湊）

慶長7年（1602）、徳川家康により常陸から出羽への移封を命じられた秋田藩初代藩主佐竹義宣は、佐竹氏と入れ替わりに常陸に移った秋田実季の居城を受け取り、ここで一冬を過ごす。翌年には現在の秋田市千秋公園の地を本拠地と定め、すぐさま城下町の建設に着手した。そして、義宣は慶長9年には家臣ともども建設途中の新城下町に移り、多くの町人や寺院にも久保田移住を命じたので、土崎地区は一時期、急速に衰退したらしい。

しかし、佐竹氏は雄物川の舟運を領国経済の大動脈と見据えていたから、土崎湊には当初から舟運と海運をつなぐ役割が期待されていた。秋田藩は藩米の移出に当たり、川船で積み下した年貢米を一旦土崎湊に荷揚げし、廻船が到着するまで藩営の倉庫に保管した。これを湊御蔵といい、その場所は現在の土崎港南一丁目にある稲荷神社から北側の地域で、

ここに数棟の土蔵を建て役人を常駐させた。この南側の穀保町と北側の新城町一帯には民間の土蔵が建ち並び、湊御蔵を補完する地域となった。

港湾機能が整うにつれ、次第に土崎湊の賑わいも復活し、藩米の移出だけでなく上方からも商品が移入され、さらには内陸部の地主米も積み出され、地主たちはその販売代金を以て上方商品を仕入れるようになる。ここで、移出米を積み出しまで保管し、上方仕入れ品を廻船から預かって一時保管したのが問屋で、これら沖出しと沖入れには藩が移出入税を課したので、問屋はその納税業務も担っていた。しかし、問屋はその預かり品の売買には関与せず、土崎湊や城下町久保田の商人、そして内陸部の地主や在方商人たちと廻船の船頭を仲介し、商取引を成立させたのが小宿だった。

土崎湊は雄物川の河口で水深が浅く、廻船が座礁する危険があった。そこで湊では、廻船が近づくと、水先案内の小船を差し向け、漣筋を知らせて安全に停泊できる所まで廻船を導いた。この案内船を導船といい、投錨した廻船に向けて湊から移出米を運び出し、廻船から荷揚げ品を湊にもたらず舢下船を付船といった。湊には廻船の船乗りたちが宿泊する宿だけでなく、導船や付船を専業に扱う宿が軒を連ね、多くの沖仲仕が集住した。こうして、土崎湊には問屋・小宿に混じって多種多様な小商人が集まってきた。

正保4年(1647)、秋田藩が国絵図に添えて幕府に提出した「出羽国稚田仙乏大道小道并船路之帳」によれば、土崎湊に関して次のように記されている。

- 一、土崎之湊 川湊、南口広百五拾間、深七尺、遠十町余。西南風二舟入、難風之時舟掛悪。此湊より本城湊へ十三里、飛島へ廿二里



【正保4年「出羽一國御絵図」より土崎湊】

土崎湊は河口港で、その河口は南を向いており、幅は約270m、水深は2.1mだという。雄物川が絶えず土砂を押し流し、川底には土砂が堆積して座礁の危険があり、船を陸地に接岸させることはできなかった。国絵図では半島状に突き出た砂浜の西側、海の中に「遠浅」と注記がなされており、その距離は「遠（浅）十町余」とあって、約1kmほどもあったという。廻船が海から河口に入り込むには西南の風が適しているといい、風の荒いときに投錨するのは難しかった。そして、由利本荘市の「本城湊」へは約52km、酒田沖の

飛島へは 88km の航路だった。

また別の箇所では、秋田領の沿岸は概して荒海で、今の暦にして 9 月中旬より翌年 4 月未までは船の通行が一切なく、5 月の初め頃より 9 月頃までの夏場に限って上方船が往来する、とも記されている。

17 世紀後半、綿花や煙草・茶など商品畑作物の生産が盛んな関西地方の農村では、干鰯肥料が投入されるようになり、やがてその動きは水田稲作にも広まっていった。こうした動きに敏感に反応したのが近江商人で、彼らは菓の行商を通して全国にネットワークをもっていたから蝦夷地北海道が鰯や鯡の豊漁にわいていたのを知っていた。彼らは若狭湾から船と船乗りをセットで雇い、魚肥を仕入れるために蝦夷地に向かったが、行きの航程で空船で出帆するのは効率が悪いので、日本海沿岸の諸港で売れそうな商品を積み込んでから出発した。これが北前船の始まりと考えられている。こうして北前船の活動が始まると、大坂商人もこれに参入するようになり、大坂の湊から商品を満載した船が魚肥仕入れを目指して北海道に向かうようになった。

19 世紀に入り、土崎湊の移出入品を見ると、塩や砂糖、鰹節、素麺などの食料品や、紙類、それに木綿やその古着、あるいは蠟燭や唐傘、線香、畳表など秋田では当時自給できなかった多様な商品が取り扱われている。移出品も米だけでなく大豆や小豆は勿論、菜種や荏胡麻など色々な農産品が加わり、土崎湊全体の取扱としては干鰯や鱒ほしか、鰯の紋り粕など魚肥類が盛んに売買され、越後村上産の茶や庄内大山の酒など地域の特産品も入荷され、さらには松前物と総称される北海道の産物も積極的に取引されていた。

18 世紀後半、老中田沼意次は積極的な経済政策を打ち出し、長崎貿易の拡大を図った。その結果、昆布や干鰯・フカヒレ・煎海鼠などの乾燥海産物が積極的に輸出されるようになった。それにより、魚肥だけでなくこれらの海産物を求めた多くの北前稼ぎの廻船が蝦夷地北海道に向かうようになった。

土崎湊のある廻船問屋の顧客台帳ともいえる「客船帳」によれば、江戸時代の後半、土崎湊には瀬戸内海東部、大坂よりの和泉・摂津・淡路・阿波・讃岐方面を中心に、瀬戸内海沿岸一帯から北九州地方、そして山陰からも廻船が定期的に来航していたことがわかる。秋田藩の蔵米や商人米を積み込むためだったり、蝦夷地に向けて北前船の稼ぎをするものだったり、その目的は区々だが、いずれも大型で長距離航路に就く船だった。

そして注意すべきは、そうした長距離を走る大型船に混じって、由利海岸から庄内・越後に連なる一帯、そして粟島・飛島・佐渡方面からも 3 人乗り、5 人乗りほどの小型船がたくさん訪れている点である。こうした小型船が近隣の沿岸地域を緊密に行き交い、活発な商取引を繰り返していたところにこの地域の特殊性があり、日本海海運が活況を呈した源泉があった。

天明 8 年（1788）、幕府巡検使に随行して秋田を訪れた地理学者の古川古松軒は『東遊雑記』の中で土崎湊について「町もあしからず、千三百余軒、娼家もありて賑わしき町なり。久保田の本町よりも湊町の方すぐれたり」と記している。備中岡山県出身で江戸に出て活躍した古松軒は、測量術を修め、諸国を周遊して各地の地誌に精通していたから、秋田領に限らず当時の東北地方全般に対してあまり高い評価を与えていなかった。その中で、土崎の湊町は 1300 軒余もの民家が軒を連ね、ふるさと瀬戸内の湊町と見比べてのことであろうか、町は悪くない、決して見劣りしないと述べている。いかにも湊町らしく遊

女屋もあって、町全体が賑やかだ。久保田城下の大町筋より土崎湊の方が優れている、と大いに褒め称えている。湊町の開放感がよほど気に入ったらしい。

4. 近代（大型クルーズ客船を迎える近代港湾）

明治に入り、政商岩崎弥太郎率いる三菱商会や半官半民の共同運輸会社が設立され、明治 18 年(1885)、両社が合併して日本郵船会社が結成されると、日本は本格的な近代海運の時代を迎える。しかし、土崎港の水深は浅く大型船の着港には大きな障害となっていた。

そこで明治 13 年(1880)、土崎港の住民は秋田県に港の整備を願い出、その後も引き続き運動を展開した。その結果、同 18 年、内務省土木技師古市公威による古市波止場が竣工し、明治 29 年には旧秋田銀行の設立にも参加した港商人近江谷栄次が、地元経済の基盤を整備すべく私財を投じて土崎港の改修に着手する。近江谷は後に東大教授となって港湾工学の父とまで言われた広井勇を招いて土崎港の設計を依頼し、さらに明治 32 年、港の有志らと土崎築港同盟会を結成し、県議会への働きかけを強めた。

明治 33 年(1900)12 月、県議会は秋田市が要望する雄物川改修工事を承認すると、同時に土崎港の修築工事と船川港の整備を議決した。そして、2 年後には雄物川河口部右岸の東部護岸工事と、反対側の西部水制工事が完了する。この東部護岸は広井の設計になるもので広井波止場とも近江谷波止場ともよばれ、土崎港の荷揚場となった。ところが、明治 37 年、日露戦争が開戦したため工事は中断され、6 年後の明治 43 年になって内務省港湾調査会が土崎港と船川港を合わせて一港と見なし第 2 種重要港湾と認定したことにより、中断していた築港工事が再開されることとなった。

明治 38 年 9 月、奥羽線が全線開通すると、2 年後の明治 40 年、旧国鉄は土崎港近くに雄物川荷物取扱所を開設した。鉄道輸送と土崎港の関係を入港船舶数で見れば、奥羽線開通以前の明治 27 年(1894)、汽船 123 隻、西洋型帆船 30 隻、和船 488 隻だったものが、大正元年(1912)には、それぞれ 192 隻、120 隻、271 隻となっている。ここからは、和船が激減して雄物川舟運が打撃を受けた一方で、土崎港の海運は奥羽線の開通にかかわらず発展していることがわかるだろう。

雄物川河口改修工事は県議会を通過したが、その後も秋田市の浸水被害は続いていた。そこで秋田市は大正 3 年(1914)、今度は国に対して雄物川の改修工事を請願した。翌年、帝国議会でこれが採択され、大正 6 年より 10 年間の継続事業として内務省と秋田県による直営方式で改修工事が始まった。しかし、この工事は大正 12 年の関東大震災や昭和 2 年(1927)から始まる金融恐慌、世界恐慌、昭和恐慌などで政府の緊縮財政が続いたため工費が繰り延べされ、ようやく昭和 13 年(1938)になって完成した。

雄物川放水路が完成に近づき、段々とその姿を見せ始めると、土崎港町には第 2 期の築港運動が盛り上がる。それは、昭和 3 年から続けられてきた港湾工事を一段と拡充しようとするもので、昭和 14 年、県の依頼により日本港湾協会が策定した土崎港修築計画では、1 万トン級船舶の出入港が目指されている。

だが翌昭和 15 年 12 月、日本はアメリカと開戦するに至り、これらの工事は中断されたばかりか、昭和 20 年 8 月 14 日の土崎空襲で工事資材は破壊され、浚渫船も沈没し、港一帯は甚大な被害を受けた。この戦争中の昭和 16 年、土崎港町は秋田市に合併され、土崎港は秋田港となる。秋田港の復興は、昭和 23 年、廃艦となった軍艦 3 隻を沈め、500mに

及ぶ北防波堤を延長する工事から始まった。昭和 29 年には秋田臨海工業地帯の整備計画を 10 年計画で策定し、秋田港には水深 10m の 1 万トン岸壁の建設を決定する。昭和 37 年、国により秋田港は船川港と一本化されて秋田船川港となり、昭和 40 年の秋田湾地区新産業都市指定へとつながった。そして、同年には中島埠頭に 1 万トン岸壁が完成するとともに、関税法により外国貿易船の出入港が許される開港の指定も受けて、近代港湾発展の基礎が確立する。

その後、新城川河口の大浜地区に堀込港湾を整備し、その西側を埋め立てて外港地区を造成した。平成 20 年(2008)には海運で運ばれてきた 40 フィート海上コンテナを鉄道輸送するシー・アンド・レール構想の実験輸送もおこなわれた。また、国内外の大型クルーズ客船も入港するようになり、平成 30 年には秋田港にクルーズターミナルが整えられ、JR 東日本は隣接する秋田港駅から貨物線を利用して秋田駅を結び、この区間に乗船客専用の列車「あきたクルーズ号」の運行を開始した。そして、県は世界最大 22 万トン級の客船が寄港できるように秋田港を整備する計画を明らかにしている。



【国土交通省秋田港湾事務所 HP より大型クルーズ客船】

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

（1）名字と町名

寛文元年(1661)、羽州街道に沿って一列に連なる 10ヶ町が土崎湊総町として町奉行支配の正式な町と認定された。このとき、その中央部に位置して大商人が軒を連ねたのが上・下酒田町や永覚町・加賀町だった。永覚町の町名の由来は詳しくはわからないが、この町で廻船問屋を営んだ有力商人の間杉家は、戦国時代の混乱期に戦乱を避けて福井県の越前国から土崎湊に移住し、秋田では手に入らない物資を若狭方面から仕入れ、秋田の人々に提供したと伝えられている。

また、上・下酒田町や加賀町も、庄内酒田や石川県の加賀国など日本海沿岸地方と海を介した密接なつながりを予測させる。そして秋田市には越後谷・能登谷・加賀谷・越前谷・若狭・近江谷・淡路といった日本海沿岸から瀬戸内海方面の旧国名を名字とする人が数多く暮らしている。これは正に海運を介した活発な交流活動の証しに他ならない。

（2）あいや節

土崎港を代表する夏祭りの土崎港曳山まつりには、寄せ太鼓・港ばやし・あいや節・港剣ばやし・加相ばやし、という 5つの港ばやしが演奏される。この内、あいや節は江戸時代に発展した日本海の家運に関して船乗りたちの広範囲な交流活動によって伝えられ定着したものである。音曲の源流は長崎県平戸や熊本県天草など九州の西海岸で唄われたハイヤ節で、この地方の船乗りたちが各地に航路を延ばしながら広めていったと考えられている。元来は酒宴の席で女性が船乗りを相手に唄った酒盛り歌で、三味線などで賑やかな伴奏を伴う騒ぎ唄でもあった。新潟県の柏崎や出雲崎では当初、「ハイヤエー」であった歌い出しが「オケサエー」と伝わって佐渡おけさで有名なおけさ節を生み、それもいつの間にか「ハア」の歌い出しに変化していった。そして、ハイヤ節は越後からさらに北に伝わる過程で、その歌い出しが「ハエヤエー」とか「アイヤエー」と微妙に変化してあいや節となった。

土崎地区では昭和 55 年(1980)以来、港和会・娯笑会・しぶき会・若波会の 4つの会が合わさって港ばやし保存会を結成し、伝統芸能の保存と継承を目的に活動を続けている。

（3）金刀比羅神社石製狛犬

金刀比羅神社は土崎湊の廻船問屋間杉五郎八と本間多左衛門両名が、取り引きのあった福井県小浜市西津の豪商古川屋嘉太夫の氏神を、享保 8 年(1723)、本間氏の別邸に勧進したことに始まる。その後、宝暦 9 年(1759)、間杉・本間両家は相談し、間杉氏が寄進した土崎港中央六丁目の現在地に社殿を建立し、祭神の大物主神と崇徳天皇二柱を移して一般社とした。現在の社殿は、幕末の弘化 3 年(1846)、廻船問屋を営む杉山七蔵など信者の寄付により建てられた。

社殿の中には福井市の足羽山から切り出された笏谷石製の狛犬一対が納められ、秋田県有形文化財に指定されている。高さは 33 cm、台座と一体で彫られており、紀年名はない。角も巻き毛もなく、たてがみや尾の彫りも極めて素朴な印象で、17 世紀前半の製作と考え

られている。江戸時代、笏谷石は露天掘りで採掘され、日本海の家運により各地に移出されていた。この狛犬は大きさとその古さから、日本海の家運が次第に展開していく時期に、本間氏が自らの屋敷に金刀比羅神社を勧進したころ、土崎湊にもたらされたのだろう。

海運を介した越前との交流と云えば、秋田県立博物館には江戸時代の越前瓦が保存されている。越前瓦は福井藩の特産品として盛んに移出されており、これは、幕末に秋田藩の町奉行を務めた橋本秀実が、随筆「八丁夜話」のなかで越前瓦が土崎湊に廻漕されていることを記している点にも符合する。



【金刀比羅神社石製狛犬】

（４）永福山嶺梅院の出雲石灯籠

嶺梅院は、室町時代の初め、後醍醐天皇の側近くに仕えた万里小路藤原藤房が、出羽国に移り住み、秋田市松原の山中に建てた庵と伝えられる。その後、庵は廃れ、江戸時代になって安永 8 年(1779)、土崎湊蒼龍寺の桂岩和尚が庵を土崎湊の現在地に移し、横手市浅舞の龍泉寺から師の本形和尚を招き、永福山嶺梅院として開山した。宗派は曹洞宗。本堂の向かい側には弁天堂があり、中には 1 丈 6 尺、4.8m の弁財天が祀られている。お堂の前に置かれる一対の石灯籠は出雲石で、島根県松江市で採取される凝灰質砂岩と見られることから、日本海の家運により土崎湊にもたらされたと考えられる。出雲石灯籠は、松江藩の時代から庭園工芸品として高い美術的価値があると評価されていた。



【永福山嶺梅院の出雲石灯籠】

（５）宝塔寺石造り五重塔

土崎湊の南東約 4 km、雄物川に注ぐ細流草生津川の側近くに位置する日蓮宗宝塔寺の石造り五重塔も、日本海の家運に密接に関わっている。詳しい建立の経緯は不明ながら、土崎湊を目指してやってきた西国の商船が嵐に巻き込まれたとき、船乗り一同、一心に宝塔寺の守護神である七面大明神に加護を願ったところ、無事に生還できたことから、そのお

礼として大坂からこれを運んできて奉納したと伝えられている。材質は花崗岩で、高さ約 9m、均整のとれた美しい造りで、秋田市の文化財に指定されている。

塔の中に貞享 3 年(1686)銘のある石碑が安置されているので、その頃の製作とみられる。18 世紀末の寛政年間を描いたとされる「秋田街道絵巻」には、草生津川に架かる面影橋を西に渡って羽州街道を左に入った所に宝塔寺や七面堂が描かれ、その参道入り口から街道を少し土崎方面に進んだ左手に、朱色の鳥居の奥に茅葺きのお堂があって、その裏手の小高い所に石造りの五重塔がはっきりと描かれている。



【宝塔寺石造り五重塔】

（6）かすべ

例年 7 月 20 日、21 日におこなわれる土崎神明社例大祭の曳山まつりは、別名「かすべ祭り」ともいわれる。当地ではエイの鰭を干物にしたものを「かすべ」といい、これを水に戻して甘辛く煮込んだ調理を祭りの日に食べる習わしがあり、そこからこう言われるようになった。「かすべ」は元来、北海道の料理で、北海道ではエイを「かすべ」といい、その干物は冬の寒気に曝して作られる。秋田で作ったのでは冷気が弱く、夏場に傷んでしまうため、より極寒の北海道から仕入れていた。今では北海道でも秋田でも多くは冬場の名物として食べられている。

江戸時代、秋田藩では「かすべ」に限らず塩引き鮭や身欠き鯿など北海道産の海産物を総称して松前物とよんでいた。北前船の活動で土崎湊と北海道との交流が深まり、その結果、これらが土崎湊にもたらされ「かすべ」の食文化も定着したと考えられる。



【かすべの煮付け】

（7）秋田街道絵巻と秋田風俗絵巻

秋田市立千秋美術館所蔵「秋田街道絵巻」3 巻と、秋田県立博物館所蔵「秋田風俗絵巻」1 巻は、ともに秋田県指定文化財で秋田藩士荻津勝孝の作と伝えられている。文化 6 年

(1809)、64歳で亡くなった勝孝は、秋田蘭画で有名な8代藩主佐竹義敦と、その嫡子で9代藩主の佐竹義和、この2人の藩主に仕えた。両絵巻とも1800年前後、寛政年間の秋田の様子を伝えている。「街道絵巻」は久保田城下から羽州街道を北上し、途中で街道から分かれ、能代を通過して津軽境の岩館まで行く沿道の風景を巧みに描写している。中でも、八橋村から土崎湊までを描いた上巻は、往来の人々であふれる土崎湊の活況や、建ち並ぶ寺社の様子、それに中州に停泊する廻船に向けて湊の土蔵から米俵を小船で運び出す仲仕たちが生きいきと描かれ、見る者を圧倒する。

一方、「風俗絵巻」は久保田城下武家屋敷の正月礼から、町人町の通町正月市、そしてサイノカミ祭り、日吉八幡神社祭礼、端午の節句、田植えなど、一年の前半の色々な行事を11の主題に分けて描き、その舞台も城下から八橋村を越えて土崎湊で終わる構成となっている。土崎湊では停泊する廻船を中心に乗船下船の旅人たち、荷下ろしした商品を馬で運ぶ者たち、番所に詰める役人、そして櫓の上で遠眼鏡をのぞく者など、浜の様子が動的に表現されている。海運で栄えた土崎湊の活況が伝わってくる。



【「秋田街道絵巻」より御蔵町と寺町】

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

(1) 虚空蔵尊堂の手水石

土崎港南一丁目の穀蔵神社に上る参道入り口に「奉納 丁内安全」と刻まれた大きな手水石がある。左側面には「講中」として能登屋善四郎以下 27 名の名前が刻まれ、裏面には「元治元年(1864)甲子六月十八日」と奉納した年紀、「世話方 小野屋吉右衛門、石工 富五郎・総五郎」、それに「導船方中 船頭善兵衛」などと刻まれている。

ここはかつての穀保町で、雄物川の舟運で運ばれてきた地主米などを保管する蔵が建ち並んでいた。土崎湊町の最南端に位置し、町を貫く羽州街道の東側は古代に秋田城があった高清水公園に続く丘陵で、西方眼下には雄物川河口から日本海を見渡せる風光明媚な場所だった。万治 3 年(1660)、ここが町屋敷として公認されたとき、住人たちは街道東側の高台に「当町一統之信仰仏トシテ虚空蔵菩薩」を安置するお堂を建てた。これが虚空蔵社で、明治政府の神仏分離令により今の穀蔵神社となった。

手水石裏面にその名を刻む善兵衛は導船の船頭で、導船は土崎湊にやってきた廻船に漕筋を示して水先を案内した。役目を終えた導船が湊に戻るとき、丘の上に建つ虚空蔵社は格好の目印になったに違いない。彼らは穀保町の住人に雇われて働いていたから、町の住人と一緒になって「丁内安全」を祈願し、手水石にその名を刻んだものと思われる。



【虚空蔵尊堂の手水石】

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

(1) おぼろ昆布

土崎湊のおぼろ昆布は、北前船の交流を抜きにしては考えられない。昆布を幾重にも重ねて圧着し、その断面を薄く削るとろろ昆布と違い、おぼろ昆布は昆布の両面を職人が包丁で一枚ずつ削り出して作る。透き通るほどの極薄で、幅も 5, 6 cmほどと広い。これを作るには厚みがあって良質な昆布が必要で、函館市周辺で採れるがごめ昆布や、そこから室蘭市に至る噴火湾一帯で収穫される真昆布が適している。

江戸時代、昆布は長崎貿易の重要な輸出品だったから、北前船はこれを競って仕入れ、北海道から持ち帰った。しかし、天候の関係で海が荒れる前に瀬戸内海に帰り着けないと判断した北前船の船頭は、翌春まで馴染みの港に船を預け、歩いて故郷の北陸地方に帰っていった。これを囲い船という。その際、積荷はすべてその湊で売却し、その代金を船主に届けることになっていた。土崎湊には例年何艘もの囲い船があったから、北海道産の昆布もこうして土崎湊に荷揚げされるところとなった。昆布は高級品なので、丁寧に薄く削って使うおぼろ昆布が生み出され、土崎湊の食文化として定着し、特色ある伝統産業として育った。



【おぼろ昆布】

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

（1）土崎神明社祭の曳山行事

神明社の祭神は天照大神で、もともとは土崎湊の肝煎を勤める川口氏の氏神だったものを、元和6年（1620）、川口氏が安東氏時代の湊城跡に社殿を新築して神明社を遷座し、湊総町の鎮守社にしたと伝えられている。そして、寺社奉行山方太郎左衛門の勤務日誌によれば、宝永元年（1704）、秋田藩は土崎湊総鎮守の伊勢大神宮祭礼を許可している。するとその翌年には、日本海海運の船乗りたちと思われる「往来之旅人共」より神輿が寄進され、それを機に神輿渡御という形で土崎湊神明社の祭礼が始まったという。

現在は、毎年7月20日と21日が例祭日で、祭りの5日前に神社で降神祭をおこなって天照大神の霊を御神輿に分霊し、20日の宵宮祭当日には町ごとに飾り立てた曳山を神社に奉納する。これを郷社参りという。そして、21日の例大祭には、道案内の神様である猿田彦大神が神明社の祭神が乗り移った御神輿を先導し、神明社を出て北から南に進み、穀保町南端の御旅所まで渡御行列をおこなう。すると、各町内の曳山もそれに続いて穀保町の御旅所に結集する。そこで、浦安の舞いが奉納され、神職が祝詞を奏上する御旅所祭をおこない、それが終わると、今度は北端の御旅所に向かって御神輿が出発し、それに続いて曳山も北に向かう。これを御幸曳山という。

各町とも2体から3体の武者人形や裸人形を使って坂上田村麻呂の蝦夷征伐など題目を決めて飾り付けた勇壮な飾り屋台を順番に曳いていく。数十人の若い衆が音頭取りの合図



【土崎神明社祭の曳山行事】

のもと、かけ声を合わせて 2 本の綱を引くが、山車は重く、しばらく進んでは休止する。山車の裏面上部には風刺を効かせた見返し人形と、その時々々の世相を反映した句を大書した木札が掲げられる。時の権力になびかず、ユーモアにくるんで反骨の気概を見せる湊衆の心意気が句に凝縮されていて面白い。見返し人形の下が囃子櫓で、ここで太鼓・小鼓・笛・播鉦・三味線などを用いて威勢のいい寄せ太鼓を打ち、港ばやしや港剣ばやし、加相ばやし、あいや節などが奏でられる。山車が止まると、各町一斉に自慢の踊りを披露して祭りに華を添える。

土崎港曳山まつりは、平成 9 年（1997）、「土崎神明社祭の曳山行事」として国指定重要無形文化財に認定された。秋田県内では「角館祭の山行事」が同 3 年に同じく認定を受けており、同 26 年には「花輪祭の屋台行事」も同様に国指定となった。そして同 28 年、これら秋田県内 3 つの国指定重要無形文化財をセットにしてユネスコは「山・鉦・屋台行事」を世界無形文化遺産に認定した。

（2）『種蒔く人』

日本のプロレタリア文学運動の出発点となった文芸雑誌『種蒔く人』は、小牧近江・金子洋文・今野賢三らにより大正 10 年(1921)土崎港町で創刊された。小牧近江は、本名を近江谷駟といい、近代秋田港の築港に尽力した実業家で衆議院議員も務めた近江谷栄次の長男である。近江は明治 43 年(1910)、フランスに渡り、パリ大学法学部を卒業後、大正 8 年に帰国した。留学中、第一次世界大戦前後の社会運動の影響を受け、反戦運動に参加。帰国後、反戦運動の種を蒔くという意味を込めて、同郷の金子や今野らとともに同人誌『種蒔く人』を創刊した。表紙には 19 世紀フランスの農民画家で知られるフランソワ・ミレーの『種蒔く人』が使われている。土崎での刊行は 3 号までで、以後、活動の場を東京に移し、東京版『種蒔く人』は官憲の弾圧を受けながらも大正 12 年、20 号まで刊行された。



【『種蒔く人』の記念碑】

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）町並みと小路

土崎湊町は南北に縦貫する羽州街道に沿って南から順に、穀保町・御蔵町・新城町・上酒田町・下酒田町・永覚町・加賀町・小鴨町・萱村町（肴町）・萩町・新町と 11ヶ町が一行に連なっている。その長さは全体で約 1.9km ほどにもなる。この内、御蔵町は湊御蔵が設けられた藩の直営地で、残りの 10ヶ町が総町として町奉行が支配する行政上の町地だった。新城町より南部は年貢米を保管する倉庫業者が多く、北部では肴町ともよばれた萱村町が魚類販売に専売権を持ち、萩町や新町とともに小商人が多く活動した。そして、これらに挟まれた上・下酒田町から小鴨町までが大商人が軒を連ねる地域で、小鴨町の土崎郵便局がある所は、総町で負担する伝馬役を取り仕切る駅馬役所が置かれた場所だった。

町屋が密集した土崎湊町では江戸時代、火災が頻発し何度も大火に見舞われている。そこで藩は、民家を移転させ、町と町を区切る小路を拡幅して防火対策を取った。その結果、狭い小路でも 3間 2尺、多くは 4間から 5間 3尺にも広げられ、本街道にも見劣りしない小路となった。これらの町割りが今に残り、当時の面影を偲ばせてくれる。



【秋田市所蔵「湊町古絵図」】

（2）寺町

戦国時代、秋田氏の城下町だった土崎湊には多くの寺院が密集し、ほぼすべての宗派が揃っている。平成 30 年度秋田県宗教法人名簿によれば、土崎地区には 18 の寺院と 6 つの神社があり、その宗派ごと内訳は天台宗 1、真言宗 2、浄土宗 2、浄土真宗 5、時宗 1、臨済宗 1、曹洞宗 2、日蓮宗 3、その他 1 となっている。秋田市および秋田県全体で見ると、秋田藩主佐竹氏の菩提寺が曹洞宗だったこともあり、曹洞宗寺院が占める割合はそれぞれ 34%、51% と多数を占めている。対して土崎地区では曹洞宗にも増して浄土系寺院が 39% と最も多い。これは、佐竹氏以前から海運を通して浄土教の信者が多い北陸地方との人的交流があったことの反映だろう。

各寺院が通りに並んで密集しているのも特徴的で、まず土崎神明社の鳥居を西に出てす

ぐの十字路を南に折れると正善院に行き当たる。するとその南隣には西船寺と本住寺があり、一区画あいて明称寺と続いている。これら寺院の東辺には羽州街道の本街道に平行して南北に一本の小道が通じていて、これを山道通りという。山道通りを挟んで西船寺の東隣には休宝寺があり、その南には山道通り東側に沿って興安寺・満船寺と3ヶ寺が続いている。土崎湊町は大火が多く、満船寺は最初、通りの反対側、本住寺と明称寺の間にあったものが大火により現在地に移転したのだった。その満船寺の南隣は、かつて藩主が土崎湊に来遊した際のお休み所があった所で、その南側に蒼龍寺・正光寺・浄円寺・善導寺と4ヶ寺が連続している。そして、山道通り最南端には、通りを挟んで東西に多門院と金光寺が並び、これら寺町の景観は「秋田街道絵巻」に描かれる土崎湊寺町の様子そのまま、歴史的景観を今に伝えている。

（3）五輪塔

秋田市市内の護国神社北側に高さ2mを超える大きな五輪塔が建っている。ここは古代出羽国を治める国府でもあった秋田城が置かれた所で、雄物川河口の土崎湊から約2kmほど東南の台地上に位置している。五輪塔がある場所は国府の役人が湊に入る船を見張る場所だったという。江戸時代も湊に入る廻船にとっては、この巨大な五輪塔が格好の目印になっていた。全国を遊歴し多くの真景画を残した浄土宗の僧侶白雲上人は、寛政から文化のころ秋田領を訪れ、この地で「寺内道五輪より土崎湊望図」を描いている。そこにははるか遠くに男鹿の山並みを臨みながら、すぐ近くに停泊する幾艘もの廻船が高い帆柱を林立させているのを見下ろすかのように、岡の上に建つ大きな五輪塔が描かれている。

これは、寛永20年(1643)、城下町久保田の豪商森九蔵が建立したものだ。ところが、白雲来遊直後の文化元年(1804)象潟地震と、同7年の男鹿大地震で倒壊し、長くその姿を失ってしまった。しかし、幸いにも森家の菩提寺である秋田市旭北の当福寺に姉妹塔が残っており、昭和42年(1967)、秋田県護国神社鎮座100年を記念して当福寺よりここに移して復元したものである。



【護国神社の五輪塔】

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

秋田市は平成 29 年(2017)4 月、函館市や松前町、敦賀市など日本海沿岸 11 の市町と共に、文化庁より「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」として日本遺産に認定された。これを受けて市は、土崎地区の歴史と文化を伝える施設として、平成 30 年 3 月、秋田市土崎みなと歴史伝承館を設置し、指定管理者の制度により土崎みなと街づくり協議会がこの運営に当たっている。

2 階建て、延床面積 1,394 m²の規模で、展示室・文化継承室・調査学習室の 3 部門から構成されている。展示室は土崎地区の歴史や文化に関心のある市民を対象に、土崎を特質付ける北前船が活躍した日本海海運、土崎神明社祭の曳山行事、そして日本最後の空襲被災となった土崎空襲について展示をおこなっている。入り口を入った最初の部屋が常設展示室で、中央には 10 分の 1 サイズの北前船が仕切りもなしに置かれ、壁面の一方を利用して土崎地区の歴史年表がまとめられ、反対側には「秋田街道絵巻」が彩り豊かに複製されている。街道絵巻はタッチパネルになっており、見たい所に触れると拡大して見たり、解説を聞いたりすることができる。

常設展示室の右手奥が 2 階まで吹き抜けの曳山展示ホールで、高さ約 11.5m の曳山が実物展示され、壁面には曳山に参加する各町内の町紋がはいった提灯が並び、9 面マルチビジョン画面では曳山行事が随時放映される。常設展示室の正面奥が空襲展示ホールで、終戦を告げる玉音放送の前夜、秋田油田の製油工場が標的とされ大規模な被害を受けた歴史を伝えている。被災し黒焦げになりながらも残った旧日本石油秋田製油所の建物の一部が移築され、戦争の傷跡が生々しい。そして、もう 1 室、特別企画を組んだ際の企画展示室が 2 階に設けられている。

この館の特徴は、土崎みなとの文化を継承するための部屋が設けられている点にある。曳山展示ホールに接続してその隣には、伝承室が設けられ、ここで港ばやしの練習や、曳山の組み立て練習ができる。土崎地区には港ばやし保存会と土崎港伝統芸能伝承会があり、この部屋と曳山展示ホールを使って活動している。港ばやし保存会は毎週日曜日に定期演奏会を開き、展示されている実際の曳山に乗って演奏し、来館者に日頃の成果を披露するとともに技能の伝承に努めている。伝統芸能伝承会では、毎月 2 回程度、隔週の日曜ごとに展示ホールを利用して踊りを披露し、踊りの講習会を開催している。また、企画展示室下の 1 階部分は外に通じるピロティになっており、ここでも踊りの練習ができるよう工夫が凝らされている。

調査学習に関しては、1 階の資料調査室では土崎空襲に関連して平和学習に関する書籍が配架され、2 階には広さ約 30 m²の学習室が 2 部屋あり、移動式の壁をよせれば 1 部屋として広く利用することもできる。秋田県文化財保護協会の支部が定期研修会の会場に利用したり、地元の学習会や研究会がここを活用している。また、2 階には 3 階の高さまで続く階段教室もあり、ここを利用して各種学習成果の発表会や講演会が企画されている。

当館は、土崎地区の歴史や文化に関心のある方が自由に使える施設であるとともに、館としても様々なイベントに取り組んでいる。「土崎歴史探訪 街あるき」や「羽州街道歴史まつり」と題して実地のフィールドワークをおこなったり、かすべの煮付け試食会を企画したりと積極的な取り組みが見られる。

秋田市土崎港三丁目、JR 土崎駅からは徒歩 10 分、国道 7 号線沿いに 28 台分の駐車場を備え、便利な場所に立地している。年末年始と火曜日が定休日、開館時間は午前 9 時から午後 5 時まで。入館は無料で、電話予約により各種学習室や伝承室を利用できる。



【「秋田市土崎みなと歴史伝承館」の外観】

【参考資料】

- 秋田県編 1915～1917『秋田県史 第1冊～第7冊』秋田県
秋田市編 2000『秋田市史 第15巻 美術工芸編』秋田市
" 2003『秋田市史 第16巻 民俗編』 "
- " 2004『秋田市史 第4巻 近現代Ⅰ 通史編』 "
- " 2005『秋田市史 第5巻 近現代Ⅱ 通史編』 "
- " 2000『秋田市史 近代史料編 上』 "
- " 2001『秋田市史 近代史料編 下』 "
- 秋田市役所土崎出張所編 1979『土崎港町史』歴史図書社
橋本宗彦編 1898『秋田沿革史大成 上巻』
加賀谷三次郎著 1928『土崎築港誌』土崎文化協会
今野賢三編 1934『土崎発達史』土崎発達史刊行会
新秋田叢書編集委員会 1972『第二期 新秋田叢書（一）』歴史図書社
浅野建二編 1983『日本民謡大事典』雄山閣出版

HP ユネスコ無形文化遺産 - 文化遺産オンライン

HP 文化庁 日本遺産ポータルサイト「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」

HP 国土交通省東北地方整備局秋田港湾事務所

HP 秋田県生活環境部県民生活課「秋田県宗教法人名簿」

HP 秋田県「秋田県デジタルアーカイブズ」

HP 秋田市土崎みなと歴史伝承館「土崎みなと歴史伝承館だより」

HP 秋田市「秋田市所在国縣市指定文化財一覧」